

川端康成の中世

山 本 寿 夫

はてしなく黒潮流れさる紀州の浜辺、白砂の島々を渦潮めぐる瀬戸内をはるか遠い記憶の底にとどめてゐても、置なはる青垣山にこもれる大和に栄えた上代文化は所詮は山の文化である。日本の文学の曙を山の文学とみるならば、平安遷都とともに山から野辺に流れ下った川の文学として水の性格を平安文学は持つことにならう。再び山に帰り入らんとし入りえず川辺にとどまるもの鎌倉室町の文学であれば、近世文学は大川端の文学として川口に栄え、海洋に大手をひろげて立つ近代文学に至るのである。ともあれ中世の文学は川の文学、あらゆる面において水の様相を現はしてゐるのである。方丈記の冒頭に鴨長明は、

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。

と書きだすのであるが、これは単に彼の無常観の表出にとどまるものではあるまい。中世の文学の姿勢と様相を適確に象徴的に言ひ得てゐるものとみるべきであらう。とくに自然の変異と人間社会の様相とそれにかかはる作者の心情とが流転といふ点において、ゆく河に結集し同一同時様に合一して語られてゐる点に注目しておきたい。旅の詩人芭蕉が西行に傾倒し、宗祇をしたって

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利久が茶

における、その貫道する物は一なり。
といひ、また

予が風雅は夏姪冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。ただ釈阿・西行のことばのみ、かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれごとくも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかかせ給ひしものにも、「これらは歌に実ありて、しかも悲しびをそふる」とのたまひ侍りしとかや。さればこのみことばを力として其の細き一筋をたどりうしなふ事なかれ。

といったとき彼の文学の源流が中世にあることを一きはあざやかにしてゐるのである。ゆく河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず、流れ来り流れ去つて一所に執着拘泥することのないもの、長明においては文学の対象として形象化されたものは、野ざらしを心に旅を栖とし旅に死んだ芭蕉においては文学の主体の存在のあり方において具象化してくるのである。

二

『茨木市にて』の終りのところで川端は

愈け極まりない大学生の私は英文科の一年で国文学科へ移るのに「相手は日本語だから。」と言つたものだが、その通りであると思ふ。「源氏物語」はむずかしくとも純な日本語だから、原文で誰にも読めるし、原文で読むにしくはない。語意、語釈に、こだわりなく、ただ気楽に読み進んでゆけば、そのうちおのずから分つて来るし、おのずから味わえて来る。むかし、中学生の私はそうであつた。意味はおぼろながら、私は王朝以降の古典もただに読んだ。音読することも多かつた。その音読の声は老耄の祖父と二人きりで、さびしい田舎家に住む少年の念仏・称名であり、傷声、哀号でもあつたのかもしれない。そしてわれを忘れたのであつた。「雲を出でて、われにともなふ冬の月、風や身にしむ、雪や冷めたまき」(明恵上人歌)

と書いてゐる如く、^註割と早く中学生の頃から源氏を読みかじり、それが影響を後年まで残したと考へてゐる。彼は戦争中東京へ往復の電車

と燈火管制の寢床の中で「湖月抄本源氏物語」を読み、恍惚と陶酔してゐる自分に気がついて驚き、^{註三}「千年前の文学と自分との調和に驚き直接に『源氏』と私との同じ心の流れにただよひ、そこに一切を忘れたのであった。私は日本を思ひ、自らを覚った。」とし、異境にある軍人から逆に慰問の手紙を受け取ることが少くなく^{註三}「私の作品を読み、郷愁にとらへられ、私に感謝と好意とを伝えて来たものであった。私の作品は日本を思わせるらしいのである。そのやうな郷愁も私は『源氏物語』に感じたのだったらう。」と述べてゐる。してみれば「源氏」と川端は同じ心の流れにただよひ、異境の人にも日本を思はせるものといふことになる。特に「流れ」といふ語に注目しておきたい。横光利一弔辭に「横光君僕は日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」と述べた彼は「敗戦後の私は日本古来の悲しみの中に帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるいは信じない。近代小説の根底の写実からも私は離れてしまひさうである。もとからさうであつたらう。」と云ふ彼はまた

^{註五}私は織田作之助氏の『土曜夫人』を読んだ後で自作の『虹』を校正してみても、似通つてゐるのに驚いた。同じ悲しみの流れではないかと云ひ、また同じところで

^{註六}今度の戦争中や敗戦後にも心の流れに源氏物語のあはれを宿してゐた日本人は決して少くないだらう。『土曜夫人』の悲しみも「源氏物語」のあはれも、その悲しみやあはれそのもののなかで、日本風な慰めと救ひとにやはらげられてゐるのであつて、その悲しみやあはれの正体と西洋風に裸で向ひ合うやうには出来てゐない。

と云ふのであるから「日本の山河を魂として」と云ひ、「日本古来の悲しみの中に帰ってゆく」と云ふ時の彼の底には中学生のころから影響を残してゐる源氏物語があることは争へないであらう。^{註七}「私は中学

時代に藤原の文章などを音読して、それが一生頭を離れない。」と云つてゐる通りなのである。だから彼は源氏物語の現代語訳の気持ちさへ持つてゐたのである。それは全集のあとがきに

吉村氏は「千羽鶴」を読んで「源氏物語」を連想した。それを映画製作の基調としたと言った。私には思ひがけない言葉だった。いつかは私も私の「源氏物語」を書いてみたいとねがつてゐる。また、すでに谷崎潤一郎氏の名訳があるけれども、私は私なりに、「源氏物語」の現代語訳を試みたいとねがつてゐる。

と書いてゐるので明らかであらう。このことは北条誠も

^{註八}前々から聞いていた「源氏物語」のくわしい話を氏(川端)から聞いたのは、おとしの大みそか、京都の吉川旅館であつた。芳香炉をつつきながら「源氏物語」の話になった。まず現代語訳の話になった。氏が初めてそれをやりたいともうされたのは、もう十年近い前である。私も国文科出身なので、その後二三度、その進め方について相談をうけた。それっきり沙汰やみになつていたのである。

「そのお氣持がつづいてゐるんだつたら、早速とりかかつていただきましよう。」

「源氏をやるとすれば、やっぱり京都で書いたほうがいいでしょう。そうすね。そうすると、当分は京都暮らしのほうが多くなる。」

そして案のじよう「源氏物語」の話はそれきりになつてしまつた。何ということばなしに私は、氏は本当に「源氏」の現代語訳と氏の「源氏」の二つを、書く氣になつたのだと思つた。

と書いてゐるのである。これで川端の云ふ「日本古来の悲しみの中に帰ってゆく」といふのは源氏の悲しみといふ意味にとつてよいだらう。源氏といふのを、源氏によって代表される中世といひかへてもよいだらう。

三

川端が中世に心ひかれるのは、芭蕉や宗祇や西行をあつかふ、即ち中世そのものをあつかふ『しぐれ』『反橋』『住吉』の三部作でも明らかにみられるであらう。「あなたはどこにおいでなのでせうか」といふ問ひかけにはじまって、しめくられる三部作なのである。例へば『宿駅』において

宗祇の句にはしぐれが多い。芭蕉も宗祇の「しぐれ」を慕つて、生涯を旅としたが、乱世の宗祇の旅は、太平の世の芭蕉の旅よりも、大戦中の私の胸にしみるものがあつた。

と云つてゐるそのしぐれを題名とした『しぐれ』の書き出しは

しぐれは私を古い日本のかなしみに引き入れるものですから、逆にそれをまぎらはさうと、しぐれの詩人と言はれる宗祇の連歌などを拾ひ読みしてをりますうちに、やはりときどき落葉の音が聞えます。葉の落ちるには早し、また考へてみますと私の書斎の屋根に葉の落ちる木はないのであります。してみると落葉の音は幻の音でありませうか。私は薄気味悪くなりまして、じつと耳をすましてみますと落葉の音は聞えません。ところがぼんやり読んでをりますとまた落葉の音が聞えます。私は寒けがしました。この幻の落葉の音は私の遠い過去からでも聞えて来るやうに思つたからであります。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利久が茶における、その貫通するものは一なり、と私は芭蕉の言葉で魔よけのやうにつぶやいてみるのであります。私は芭蕉の百代の遠眼を感じるよりも、芭蕉の一大勇猛心に打たれるのであります。この言葉の前には、つひに無芸無能にして、只、この一筋に繋る、とあり、この言葉の後には、しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見るところ、花にあらずといふことなし、おもふところ月にあらずといふことなし。像、花にあらずの時は夷狄にひとし。心花にあらずの時は鳥獸に類す、とあつて、芭蕉を語るにはのがせぬ笈の小文の枕でありますが、この前後の強い言葉よりもなほ強く

私にひびきますのは、西行、宗祇、雪舟、利久と四人の古人をかぞへて、その貫通するものは一なりと芭蕉みづからの道を見た叫びで、古今を貫く一すぢの稲妻を見るやうに私は打たれるのであります。芭蕉は四十四五でありました。この枕につづいて紀行は、神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」と本文に入りまして、ここでもしぐれの宿りの宗祇を思つたことでありませう。

と云ふのである。この引用の前半、即ち「落葉の音は幻の音でありませうか。私の遠い過去からでも聞えてくるやうに思つた。」と云ふのを焦点とする所は、「山の音」の

八月の十日前だが、虫が鳴いてゐる。木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も聞える。そうして、ふと信吾に山の音が聞えた。……

遠い風の音に似てゐるが、地鳴りとでもいふ深い底力があつた。自分の頭のなかに聞えるやうでもあるので、信吾は耳鳴りかと、思つて、頭を振つてみた。音はやんだ。音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそはれた。風の音か、海の音か、耳鳴りかと、信吾は冷静に考へたつもりだったが、そんな音などしなかつたのではないかと思はれた。しかし確かに山の音は聞えてゐた。

といふ重要な叙述と相連なるものである。「山の音」と「千羽鶴」はそれぞれの業苦に生きる男と女のかなしみと美しさをあはれな心と冷徹な眼にしみじみと描き出したものとして、川端源氏などといふ説もあるが、それはともかくとして「山の音」も「しぐれ」の延長線上にあることを示してゐるものである。引用文の後半は宗祇終焉記を引用し芭蕉や慈鎮など旅に死んだ古人、乱世に苦しんだ先人を偲ぶことになる。そして手のデッサンの夢から友人の須山と双子の娼婦を買ふ思ひ出になつて現実につながつてくるのである。特に宗祇の「旅の世にまた旅寝して草枕夢のうちにぞ夢を見るかな」をあげて

私は乱離の世を古典とともに長生きした宗祇がなつかしまれるところもありまして、駿河の宗長の庵にも二三度行つたことのあるのなどを思ひ出しな

が浅い眠りにはいりますと夢を見ました。

といふ点、旅と夢の中世が夢と合して現代につながるところ、人物も風景も心理も川端にとっては同じで心の鏡に映った幻であるから時空を超えて中世も現代同様なのであらう。この点この系列の作品は川端が直接に中世につながることを明らかにしているといつてよい。『反橋』は「仏は常にいませども現^{うつ}ならぬぞ哀れる、人の音せぬ曉にほのかに夢に見え給ふ。」といふ梁塵秘抄の歌を書いた友人須山の色紙を住吉の宿で発見し、須山のやうな男には仏はいますはずはあるまいから、この仏をなにかの象徴と受取ったのであらうといふことから始まり、戦乱の末世のただなかに生きた將軍義政義尚父子の歌切、定家の歌切、実隆公記の実隆や後三条天皇の住吉の歌などが次々にあらはれて

「住吉の神はあはれと思ふらむ空しき舟をさして来たれば」の後三条天皇の御製の空しき舟は私の心にほかならないやうに、私の生にほかならないやうに思へてしかたないのであります。

と云ふことになり、私が五つの時に住吉神社の反橋を渡ったことがあるかないか、それが私には夢やゆめうつつや夢とわかぬかなでありますと住吉神社に詣でた時の継母への追憶につながってゆくのである。

『住吉』は琴の師匠の前で継母にむずかった幼い日の追憶と、継子いじめを主題とする住吉物語とが、怪しい心理の交錯をして継母は母の妹であることを聞かされたのが住吉の反橋の上で五つの時であった。

といふことで『反橋』・『しぐれ』と呼応して終るのである。以上二三の例によつても既に明らかな如く、川端の「日本古来の悲しみの中に帰ってゆく」といふのは直接には中世に通じてゆくことであることが明瞭であらう。

四

一九六八年度ノーベル文学賞を受けた川端はスウェーデン・アカデミーで「美しい日本の私——その序説」と題して記念講演を行なったのであるが、それは冒頭揮毫をもとめられた折りによく書くことがあるといふ道元禪師の「本来面目」と題する歌と明恵上人の「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷めたき。」といふ歌をあげ、ついでこの歌につく歌物語といへるほどの長く詳しい詞書きを述べ、この歌の心を「宗教、哲学の思索をする心と、月が微妙に相応じ相交る」のを歌つてゐるのであり「まことに心やさしい思ひやりの歌とも受け取れ」、「自然、そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌である」と云ふのである。つづいて茶会の感会から自作『千羽鶴』良寛の歌『末期の眼』より一休を語り伊勢物語に至り古今集枕草子にふれ、

「殊に『源氏物語』は古今を通じて、日本の最高の小説で、現代にもこれに及ぶ小説はまだなく、十世紀に、このやうに近代的でもある長編小説が書かれたのは、世界の奇跡として、海外にも広く知られてゐます。」と云ひ「少年の私が古語をよく分らぬながら読みましたのも、この平安文学の古典が多く、なかでも『源氏物語』が心におのづからしみこんでいると思ひます。」といまここで注目すべき語で自らを語り『源氏物語』の後、日本の小説はこの名作へのあこがれ、そして真似や作り変へが、幾百年も続いたのでありました。和歌は勿論、美術工芸から造園にまで『源氏物語』は深く広く、美の糧となり続けたのであります。」と源氏の重要さとそれへの傾倒が少年時代以来なることをあかし、新古今集については、「妖艶、幽玄、余情を重んじ、感覺の幻想を加へ、近代的な象徴詩に通うのであります。」と云ひ、この二つの時代、平安と鎌倉をつなぐ代表的な歌人として西行があるとし、小野の町の「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」・「夢路には足を休めず通へども現^{うつ}に一目見しことは

あらず」の夢の歌をあげ、新古今集を経たのちさらに微妙となった「真萩散る庭の秋風身にしみて夕日の影ぞ壁に消えゆく」といふ一休と同じころの永福門院の歌は、「日本の繊細な哀愁の象徴で、私により多く近いと感じます」とのべ最後に「冬雪さえて冷しかりけり」の道元禪師や「われにともなふ冬の月」の明恵上人はほぼ新古今集時代の人であること、そして明恵上人と西行との歌の贈答、歌物語、明恵伝より西行との歌物語を引用し

^{註九} 日本あるいは、東洋の「虚空」、無はここにも言ひあてられてゐます。私の作品を虚無と言ふ評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉はあてはまりません。心の根本がちがふと思つてゐます。

と云つて終るのである。全世界に向かひ己の文学のすべてを適確に、しかもさりげなく語り尽した講演において、源氏物語を讃へ中世に傾倒した己を語つたことは注目しておかねばなるまい。また同様に注意すべきは、道元・明恵にはじまり、明恵・西行、道元に終ることであり、自然、それは四季の推移としてとらへられ、この自然に没入合一する所に美の顯現があるとする点である。これは

^{註十} 「我」をなくして「無」になるのです。無は西洋流の虚無ではなく、むしろその逆で、万有が自在に通ふ空、無涯無辺、無尽蔵の心の宇宙なのです。といふ「禪に通じたものなのでせう。」といふことになるのである。これは江藤淳が^{註十一}いふ如く、自然にではなく歴史に永生への手がかりを見ようとする西洋の伝統——現代ではさらに推し進められて、歴史への参訓にのみ生の意味を認めようとするマルキシズムといふかたちに変質してゐる。——西欧の知識人の前に、良寛の辞世「形見とて何か残さん春は花山ほととぎす秋はもみじ葉」をあげて、「ありきたりの事柄とありふれた言葉をためらいもなくと言ふよりも、ことさらもとめて、連ねて重ねるうちに日本の真髓を伝へた。」とし「自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思はぬが、自分の死

後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだらう。」といふ意味だと解釈し、ここには「日本古来の心情がこもつてゐるとともに、良寛の宗教の心も聞える。」と云ひここで川端は、歴史などといふものはない。あるのは自然だけだ、人間と永遠をつなぐのは自然であり、その自然に人間は「無」を介して結びつけられる、とさりげないかたちで提示して、凡そ西洋と全く異質の思想を対置したのである。ここに川端の中世につながる思想の現代的意味が強く感じられるのである。

五

さてまた「敗戦後の私は日本古来の悲しみの中に帰つてゆくばかりである」といふ「日本古来の悲しみ」を考へてみると『月見』に次の如くあるのは注意すべきであらう。

私は月があれば月を見る。しかし月を見ると、いつも、『日本のかなしさ』といふやうなものが身にしみる。月の古文学を思ひ出すとはかぎらない月や夜空そのものから感じるもので、それはむしろなげない自己嫌悪をとまなふ。もつとも身にしみたのは、やはり戦争中の冬の月であつたらう。……鎌倉の人家もまばらな小さい谷である。燈火管制で明りが一つもない。寝静まった谷の冬の月は日本のかなしみで私を凍えさせるやうだった。このやうに日本の伝統を強く感じさせられたことはない。かなしみから伝統を感じるのも、私のセンチメンタルな性だらうが、すでに敗けいくさであつたし、人々の暮しもみじめだった。その夜まわりの冬の月は生涯私についてまはるだらうか。

と云つて、冬の月に日本のかなしみ、日本の伝統を強く感じたとし、それは生涯私についてまはると云ふのである。つい

今夜の仲秋明月を車の窓から見ながらも、私はやはりその冬の月を思ひ出してゐる。その冬の月のころは、日本の歴史小説をいくつか書かうと考へてゐた。例へば、後鳥羽院や明恵上人を主にして、定家や家隆などの歌人を配

し、承久の乱のころとか、義政の子の美少年將軍義尚や宗祇などの連歌師を扱って、東山時代あるいは応仁の乱のころとか、利久に至る茶の人たちとか、いろいろあったが、その後ほとんど調べるゆとりもないし、いつ手がつけられるやらわからない。

と日本の伝統・日本の悲しみを強く感じてゐる時には後鳥羽院・明恵上人を主として小説を書きたいと思つたと云ふのである、また

しかし書きたいと思つた昔の人にゆかりのあるものを、近年は売りものの古美術品としてしきりに見ると、前に書かうと思つておいただけでも、やはり無縁でないのは幸ひである。明恵上人の「夢の記」の断簡や義尚といふ歌切（これは確かでない）などを、書斎の押入れから出してながめてみると、不思議ななつかしさを感じる。定家や俊成の字は好かないので買はないが、俊成の九十の賀の時といふ手紙は、この歌人の長い生涯が思はれて、その妙な癖のある字にかかはりなく、私を誘ふものだった。定家も小倉色紙は別としても、「明月記」の断簡を見ると、あの日記を拾ひ読みした戦争中の夜が思ひ出される。……………

明恵上人を小説に書く時には、明恵上人の書を床にかけて、筆の合い間眺めていれば、それがなにか作品に働きかけることはないだらうか。

と書いてゐる。同様の趣旨のことを「古都など」にも書いてゐるのであつて、かうみてくると「日本の古来の悲しみ」はあきらかに、中世の後鳥羽院であり、定家・家隆、義尚や宗祇であり、いやそれ以上に明恵上人である。『古都』で双生児の千重子・苗子の二人の最初の出合ひが明恵上人の高山寺の描写のつぎ、即ち

高山寺では石水院の広縁から、向かいの山の姿をながめるのが千重子は好きであつた。開祖明恵上人の樹上坐禪の肖像画も好きであつた。床の脇に「鳥獣戯画」の絵巻の複製がひろげてあつた。

といふ描写の次に配されてゐるのは無意味なことではあるまい。以上で川端の「私は日本古来の悲しみの中に帰ってゆくばかりである。」といふ「日本古来の悲しみ」なるものは要するに中世的なものを強く

感じさせること既に明らかであらう。では横光利一弔辞における「日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」の「日本の山河」は如何なるものであらうか。既にのべたやうに「帰ってゆくばかり」の日本古来の悲しみが中世であつたとすれば、魂とすべき日本の山河は、帰るべき中世の魂の都でなくてはなるまい。すくなくとも中世と無縁の山河であつてはなるまい。川端は『宿駅』で次の如く云つてゐる。

東海道を京にのぼつた二人の王朝の少女、小野小町と菅原孝標の娘も、私の「東海道」に拾つておいた。文学少女の孝標の娘の旅は、「更級日記」に、自分で書いて、よく知られてゐる。上総から京まで、九十一日の道中であつた。十三歳の少女であつた。小野小町も東海道をのぼつたとすると、十三歳ぐらいの少女であつた。小町の素性は明らかでないが、出羽の国からの采女だつたといふ一説がある。もしさうだと東海道のそのさきの「奥の細道」から、小町は歩いたのだらうか。宮仕への夢を抱いて、あこがれの都へのぼる、十三歳の美少女の、遠路難渋の旅姿は、私の空想を誘ふ。この二人の少女の旅姿が、私には王朝文化の象徴のやうにも思へたりした。小町が都にのぼつたのは王朝文化の勃興期、そして孝標の娘の旅は、もはや衰退期、そのあひだに二百年があつて、王朝の女流文学は、小町に始まつて、孝標の娘に終るとも見られるからだ。

これは注目してよい。二人の都にあこがれる美少女の旅に王朝の文化の象徴をみてゐる点である。川端の作品で旅の少女といへば、いふまでもなく『伊豆の踊子』といふことにならう。『伊豆の踊子の作者』では『伊豆の踊子』は私の処女作でも出世作でもなかった。」とは云つてゐるが別の所では「なにを私の処女作と言ふべきか明らかでないが十六才の日記・招魂祭一景・油・伊豆の踊子などをそれとしてみたいが」とも云つてゐる。ともあれ『伊豆の踊子』の作者の冒頭で

『伊豆の踊子』の作者であることを、幸福と思ふのが素直であるとは、よくわかつてゐる。それになにか言ふのはひがごころであらう。『伊豆の踊

子』のやうに「愛される作品」は、作家の生涯に望んでも得られるとはかざらない。作家の質や才だけでは与へられない。『伊豆の踊子』の場合は、旅芸人とのめぐりあひが、私にこれを産ませてくれた。私が伊豆に旅をし、旅芸人が伊豆に旅をしてゐて、そしてめぐりあつた。このめぐりあひが必然であつたか、偶然であつたか。この問ひかけは人間の刻々の生存に問ひかけるのにひとしく、人間の一生に問ひかけるのにひとしく、私の答へは定まらない。

と云つてゐるのは、川端の「旅」と「めぐりあひ」「一期一会」の想ひがここにも明瞭にあらはれてゐることに注目しなければならぬ。『伊豆の踊子』の旅の終末は下田である。これについて「『伊豆の踊子』の作者」には

下田は伊豆半島を北から南への旅の終点であるし、「下田の港は、伊豆相模の温泉場などを流して歩く旅芸人が、旅の空での故郷としてなつかしがるやうな空気の漂つた町なのである。」から、学生と旅芸人といふ旅の道づれは、下田に着けば終るのではなかつたか。甲州屋といふ木賃宿で、「芸人達と同じ宿の人々とにぎやかにいさつを交してゐた。やはり芸人や香具師のやうな連中ばかりだつた。下田の港はこんな渡り鳥の巣であるらうかつた。」ここで旅芸人たちは仲間のなかにもどり、学生は仲間をはずれたのである。学生の旅は終り、旅の小説は終るところであつたらうか。

と云つてゐる。これによつてみれば、作家としての態度をきめたといはれる『伊豆の踊子』はやはり「旅の小説」であつたのである。『雪国』の旅で「雪国」は旅で生まれた小説である」と言つてゐる『雪国』の冒頭「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなった。」と『伊豆の踊子』の「暗いトンネルに入ると、冷たい雪がぼたぼた落ちてゐた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでゐた。トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫はれた峠道が稲妻のやうに流れてゐた。この模型のやうな展望の裾のはうに芸人たちの姿が見えた。」は暗い所をくぐつて桃源郷に出る。旅の小説といふ点

で重なり合ふのである。してみれば、『伊豆の踊子』の

私はそれまでにこの踊子たちを二度見てゐるのだつた。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会つた。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げてゐた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についてゐると思つた。

といふこの旅の物語のはじまりは注意しなければならない。いふなれば『伊豆の踊子』は川辺における旅の少女と出合ひにはじまり、天城の山を出て下り、川沿ひの湯ヶ野でクライマックスに達して、港町下田に至つて終る旅の小説ともいへる点やはり中世を感じるのは無理だらうか。もともと『伊豆の踊子』は選集第二巻に入つておりその「あとがき」を「この巻には旅の小説を集めてみた」と書きだし、

処女作の頃から今日に至るまで、私は宿屋で書くといふ癖がある。この巻の小説に限らず、私の全作品の大半は、旅の宿で出来たものである。従つて、私は始終家を出るけれども、たいていは切羽詰つた原稿を書くため、いはば書斎の移動であつて、旅らしい旅、旅のための旅は稀である。ここに集めた小説にも、大旅行の所産と言へるものはない。しかしとにかく、身を別の土地に移すと、なにか心がひらけて、筆も動き出す習はしであつた。それが私の作品をどういふことにしてゐるか。「伊豆の踊子」は「文芸時代」大正十五年二月号と三月号に発表したのだが、その下書は数年前に出来てゐたから、私の旅の小説の幼い出発である。近作の「雪国」や「牧歌」は、その旅の小説が少しく育つて来たものである。この旅の小説といふものに、今後は尚意義を認めて、いろいろの風に試みることを私の仕事のひとつとしてゐると思つてゐる。それはいはば、日本の故郷をもとめてゆく巡礼の心であらうか。古来の日本の文学を振りかへてみると、その著しい特色の一つは旅情——といふより旅愁だ。これが日本の古里の歌の調である。巡礼、遍路が芸や魂の修業であつたといふことは、外国もさうであらうが、日本のそれには独特の風土的なものがあつた。

と云つてゐる如く「日本の故郷をもとめてゆく巡礼の心につながる旅

の小説であつたのである。また『バリ安息』に

旅の私の胸にふれるのは、働く貧しい人の姿と、打ちひしがれたようにさびしい人の姿と、美人と少年少女と、古今東西の第一級の美術（建築もふくめて）と、そして自然とです。

とある如く働く貧しい少女として伊豆の踊子が胸にふれたのは旅であるからであらうか。

『美しい地図』に

作品の材料がすぐれた芸術となるのは作家の心の故郷としてだが、東山さんの北欧にその適切な例を見る。故郷は巡礼の出発地であり、遍歴の帰着地である。いや、芸術家の生涯の旅のどこにでもいつでもある。しかし、その故郷は、いつでもどこにでもとは、見出しがたく、行き合いがたいものである。

と云つてゐるのである。即ち川端にとっては故郷とは巡礼の出発地であり、帰着地であり、作品の材料がすぐれた芸術となるのは作家の心の故郷なのであり、作家の心の帰ってゆくべき所なのである。ここに旅の文学の川端が、前述の如く「私は日本古来の悲しみの中に帰ってゆくばかりである。」といふ帰るべき日本古来の悲しみは時間的には中世であつたのであるから、空間的にこれを言へば、あの平安の文化を象徴すると言つた旅の少女小野小町と菅原孝標の娘があこがれ上つた京でなくてはなるまい。『古都』をはじめとして『美しさと哀しみと』、『日も月も』、『虹いくたび』等川端に京を舞台とした作品が多いのはいふまでもないが、それはともかくとして『茨木市で』に

「東山熟友の如し。」とは頼山陽の詩句だが、私にも東山、西山、北山は熟友でもあるし、「揺籃」でもあつた。京都は日本のふるさとだが、私のふるさとでもある。私の村は現在茨木市にはいつてゐる、京都と大阪との中間の山裾の農村で、その山を深くはいれば丹波である。村の景色に芸はないけれども、近くに「伊勢物語」や「徒然草」に書かれた所がある。藤原鎌足の遺蹟も隣り村にある。私の村もふくめた関西の自然の中核、象徴は京の山河

で、私が京都の山河をふるさととするわけである。今は新幹線のひかりで沿線を味はうゆとりもないが、むかしは東京からの汽車が近江路にはいると、ああ、ふるさとに帰つた、日本に帰つたと、肌身になつかしさのよろこびがしみじみとしたものであつた。私は京の王朝の文学を「揺籃」としたとともに、京の自然のこまやかさを「揺籃」として育つたのであつた。」

とあるのは、川端にあっては京都は日本のふるさとであるとともに、私のふるさとであり、関西の自然の中核であり、象徴であるのである。したがつて京に帰ることは、日本に帰つたと肌身にしみじみと感ずるのであるといふのである。特にここでは「私は京の王朝の文学を揺籃としたとともに京の自然のこまやかさを揺籃として育つた」といふのは注目しておかねばならない。

以上述べ来たことを要約すると、川端の文学は自らも言ひまた世に広く言はれる如く「旅の文学」であつて、それは初期の『伊豆の踊子』が既にさうであつたやうに、『雪国』も『山の音』もさうなのであり、それは『反橋』『しぐれ』『住吉』の三部作に直接見られる如く中世に傾斜するものである。このことは彼が「日本古来の悲しみに帰って行くばかりである。」といふ帰りゆく日本古来の悲しみは中世の悲しみであり、「日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」といふ魂として生きてゆく日本の山河は、「巡礼の出発地であり、遍歴の帰着地である」「作品の材料がすぐれた芸術となる作家の心の故郷」であり、中世文化を象徴する二少女があこがれ上つた、川端のふるさと即ち日本のふるさと、京都の山河なのである。川端の文学が旅の文学であるといふこと、「日本古来の悲しみ」「日本の山河」云云といふ川端の姿勢、そのいづれもが中世へと傾斜を示すのは何故であらうか。それはいふまでもなく川端が少年の時より身にしみてその影響をうけつづけてゐる中世そのものが、冒頭に述べた如く「ゆく河の水」であつたのである。中世の文化、中世の文学そのものが川の文化、川

辺の文化であるから、一所不住の旅の性格を通してのみ中世の核心に迫ることが出来るであらう。これを試みなしえたのが川端の文学であったのである。

註一 『哀愁』による。

註二 『哀愁』全集十三卷

註三 同右

註四 同右

註五 同右

註六 同右

註七 『私の考へ』全集十三卷

註八 川端康成心の遍歴

註九 美しい日本の私―その序説

註十 美しい日本の私―その序説

註十一 川端さんの自然と言葉全集月報4